比較検討した（カウプ指数１３.０以下をやせ児とすれば，各年齢とも数名以下であり，サンプルとして少なすぎるので，１４.０未満をやせ児としてここでは取り扱った）。

保護者（主として母親）による子どもの遊び，行動，性格の判定結果をまとめてみると，おおよそ次のような特徴が指摘できる。

① 肥満児も室内あそびよりは戸外あそびを好む傾向がみられた。これは日常室内にいる時間が長いので，かえって外に出たがる傾向が強いと考えられる。

② 肥満児は動作は活発ではなく活動的とはいえないが，必ずしも運動が嫌いとはいえない。

③ 肥満児には神経質な者と全くそうでない者の両方があり，内弁慶な者とそうでない者の両方がある。これは，肥満の程度や形成過程，親の養育態度の差などによるものであろうが，幼児肥満の指導上で考慮したいことである。

④ 肥満児・普通児・やせ児を問わず，多くの母親は子どもの遊びや運動能力の発達については肯定的な評価をしており，性格面では平均的なものと評定している者が多かった。

5. 幼児の生活時間，体格，運動能力に関する調査

森　下　はるみ　（お茶の水女子大）

○目　　的

幼児期の健全な身体発達に関わりのある諸要因のうち，生活時間・体格・運動能力について，その実態と相互関係を明らかにしようと試みた。

○対象と方法

① 在宅・在園時の睡眠，食事，遊びなど各活動の所要時間と時刻を調査した。（４４０例）

② 身長，体重，皮脂厚などを測定し，肥満度の指標としてKaup 指数を算出した。

③ 運動能力調査として，走・跳・投ほかの測定をおこなった。

以上の調査は７７年秋から７８年冬にわたっている。対象の年齢は３～６歳である。

○結果と考察

① 生活時間についてみると，週日は在園時間の短かい幼稚園型と，それが長い保育所型で日課が異なり，在園時間は最小3.5時間から最長１０.５時間にわたる。しかし，午前中の日課は両型とも類似している。体育的活動については，時間的，質的に施設差が大きく，登園後から一斉保育までの自由あそび時だけに限られているもの，週何時間か，定期的に体育専任教師

による指導をおこなっているものなど様々である。活発な活動を好む幼児と静かな活動を好む幼児の差は在園時，在宅時とも自由あそび時に生じる傾向がある。

起床，就床時刻についてみると，起床時刻は郡部の方が都市よりはやく，保育所の方が幼稚園よりはやい。また就床については郡部の方が都市よりはやく，幼稚園の方が保育所よりはやい。夜の就寝平均時間は，ひるね習慣の有無により差異があるが，５７０～６５０分にわたり，休日には２０～３０分増加する。

② 肥満度と生活時間

カウプ指数１８.０以上，１５.０～１５.５，１３.０以下の三群について生活時間を比較した。１日を１００％とした時，睡眠時間は約４５％，活動時間は約４０％で，のこりを食事，身じたくなどがしめる。しかし，各群の各所要時間にはいずれも有意の差はなく，肥満度による一定の傾向はみられない。したがって，幼児の運動量を解明するには，この種生活時間調査に加え，よりくわしい面接や観察あるいは機器の併用による充足が必要と思われる。しかし，生活時間調査は　記入者個人に対する自省的役割をはたしたという反応がいくつかあった。

③ 体格と運動能力

カウプ指数と運動能力テストとの相関をみると，ボール投で０.１～０.２，２５m走でマイナス０.１～０.２の値をしめすが，他の種目ではより低い。全般的にみて，体格指数と運動成績の相関係数(p)は，身長，体重の方がカウプ指数より高く，一方，皮脂厚はカウプ指数より低いという結果をしめした。また，３，４，５歳組を比べると，年齢が高いほど体格指数との相関値は高く，運動種目からみると筋・パワー系種目（跳，投，走など）の方が，神経・調整力系種目（平衡能，敏捷性など）より高い値をしめした。

カウプ指数の大・中・小三群について３年間の運動成績の個人発達曲線を比べると，カウプ指数の大きい個体は「投」でやや上位に，小さい個体は「跳」「走」でやや上位に位置するが，いずれも個人間，個人内変動が大きく，運動能力テスト場面への適応がこの年齢期には不安定なことをうかがわせた。したがって，体格と運動成績の間は，明確な傾向はみとめられなかった。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

目的

幼児期の健全な身体発達に関わりのある諸要因のうち,生活時間・体格・運動能力について,その実態と相互関係を明らかにしょうと試みた。